晉子一伝録

完

中村俊定文庫
文庫 18
831

晋子の事跡ことく〳〵痛快の境
ならさるはなく人をしてこれ
一大快事とかんせしむ今同
條恕尺主人よく其事跡を
拾集め移居に遊ふ人の口に
膾炙せさらしめんとて録して序

東都蕉門
恕尺齋豊山著

晋子之伝

天保辛卯
大晋新刻

蕉竹居藏

書中に此老を主とふ為
なるとうなれば東都侠豪共
全くなるまゝ有りしなり今の
著作を世みしく墓中日下
晋子が掃ある所の於て
住を見ばくふ晋子を

いふ伝に御風下遊ふ
るの士なあり民吏
あり逆民傳を撰ひ
游使伝をあんか於也
隠逸に列をん加ふ
義烈の風あり風日口

吟亭と称するの雅情なる
ところを聞くに尺蠖居士に
しるしに居士と祖
父子共書刻するいとか傍
宙一夕語るしく端
緒なるこなりあらなる

文政庚寅季九月之日
日槙嶋居士長第と黄
葉ひしくるまとめ

寛文丑 [illegible] 寛文元年

七月十七日　母霊夢

人目ハ [illegible]

数しら陸地宝まゝ [illegible]

七夜 晩

住吉の松を [illegible]

[illegible] 津の [illegible]

中村侯定文庫

寛文九酉　九月廿二日誕

東叡靈字

云のうちはせもるものも門まも桂玉て

いつまてもたちてとろ紅

十歳入學　大圓寺

十四歳　於堀江町　本草綱目写

治治　主治　發明

十五歳　内經素本　易經素本写

蒲生五郎兵衛殿需之　伊勢物語書之

右表帝出来本多下野守殿へ献之

右之饗義ゝて刀　[illegible]

十六歳　草刈三越講延

服部平助講述

内賞寺太嶺和尚　詩學　易傳受

十七　桃青廿歌仙

十八　延宝午　發句合　於凡五十句合作

秋洪水

廿　延宝申　次韻　信盛七百五十句ニ対ス

辛酉

壬戌　冬　紀鮮東聘

天和　亥　栗　於芝金地院前

貞享元子　於京　蠡集

丙寅　新山家　少年の記

丁卯　續ミなしぐり　採る

四月　今如務尼卒　五十七歳

元禄元　上京　李吟亭講歌書

十一月廿二日　宗隆尼卒　於堅田　年八十四

元禄二己巳年花つみ二巻一夏百句 揃く

四辛未

五壬申 雜談集二巻 揃く

六癸酉八月九日東叡山 萩の露 揃く

行年七十二歳

七甲戌 白兄牙三巻 揃く 上京

十月十二日 芭蕉卒五十二 杉風宛 揃く

栗津義仲の墓

九丙子

庭竈牛も雑巾をすりうり

十丁丑 うゝく 二巻 揃く

十一戊寅 十二月

寛文　延宝九　天和四
貞享五

歴栗
續みなし栗
新山家
花摘　上下　非人八百
句兄弟　上中下
枯尾華
わりなし合
三上吟跋の反
まんの栗　上下

蠡集
雑談集

元禄十三　十月
三上吟
元禄十　六月
焦尾琴

晋翁著述目録

田舍の句合　誰ちゑ　松尾氏
虚栗　八津宇昔　芙蓉合
蠢集　花摘集　末芙蓉
新山家　錦繍緞　三上吟
續虚栗　雜詠集　焦尾琴
萩の露　句兄弟　類柑子

九終

秋の雨
屋上の
杉を
ぬれを
うつ

烈尺高豊山翁

晋子一傳錄

五世　烈尺齋豊山著

摂州其角ハ宝晋と号す又晋子と号す本姓竹下氏なり摂州
毋方の姓也父ハ竹下東順号素子元和八壬戌江州堅田に
おゐて産る本多下野の守に仕へて医を業とす
後宮を辞して東武に帰り和歌連歌俳諧を嗜む由之
正春の門人也

類柑子、由良、郎左門正春と云る人歌連歌ふかき人也

や生涯の癖とて書きそふ病とて筆を捨て人に交らず
たゞ一人行りて亡父京須師匠にまゐり一つの書文
年中九年の変を尽して家まうの終ひぬるやと

花摘集に正春り辞世の句を出す

義なるや哀い昨日とあるの風　正春

日記に妙敬尼とあるは寛角の母く寛享四年子卯四月八日
五十七歳にて没す

續虚栗に

四月八日母の年まうるを
家にとりて衣このへてきて和尚の
初七の数いとなみて　其角

年年来る母を如何せん
五七の日追善
和の為に母あるを南天に
雪清のみるを松の
色乃ときをとりて夕雲
各悼

和尚年月の脱
数の数をとゝ
有ゝ年年ゝ
物あるもの仏
時八ゝ者ゝ

芭蕉翁
其角
嵐雪

房治
松風
治徳
舉白
嵐雪

友子ゆ年法ゐるこの　牧之
はきりまい　あまく　香く　梅ゑ　去来
生新や　友子　ゆ　ゆ　風乃　吉　捷馬
芥子の　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　全降
ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　奥史

花摘集、晋子みつ〳〵の作ふ元禄三年のゆ　中毎つる
年法ゆ　りし　ゆ　四年　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
しより　彼　紙　ゑ　の　一　ゑ　ゑ　の　晶　法　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
法　ゑ　の　法　ゑ　ゑ　の　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
法　ゑ　の　法　ゑ　ゑ　の　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

のみ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

日記、元禄元年十一月廿二日宗隆尼堅田ゆ没ゆる紀
きゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

五元集、宗隆尼みまうゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

東順の元禄六癸酉年ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

晋子、荘の家臣長谷川宗房、はじめ蕉門に入り、俳諧を荘の家と共に学び、病床の伽の徒となる。後、勝尼寺の僧、芝三水、後上行寺日蓮宗

錦繍緞、芭蕉翁伝を作す

東領傳

芭蕉稿

夫人東領、板氏なり。その祖父江州坂田の農士竹氏と称す。板氏、晋子に嫁ぐ。晋子、七十歳にして、その妻を病む。板の形ち、ひとへに七十歳にして、その妻を病む。板の形ち、ひとへに孤の如くなるを、孤を恐れ、孤を思ふ。孤、孝多の行業、ひとへに傳聞する所、孤、孝多の衣を服し、杖を扶け、業を学び、孤、孝多の年の十歳、市庭を山居とし、むかし葬を送り、杖をさしぬきとせしかの古事のごとく、車をこれとし、山居をもって東都に移り、孤、孝多の朝市の人となる。

八月の頃い　机乃四隅　へ子村

室晋氏其角、寛文元辛丑年七月十七日東都堀江町に於て出生。幼名源義又源助と云。五元集、山王の代よりて

〔家〕を天下に名を上るは 晋翁の句に名を淫曲ふよりて上車の淫曲なり
ちまのくまのわたりまでとあり
とあり 五元集拾遺 江町子 日記五元集の句ふて堀
の名を 旦生月夜 傾城の名を草刈三載よりひ長を
門よりの 五元集 是十四五の頃 桃青芭蕉仙 延宝五丁巳
螺舎とより 晋子十七歳也 螺舎其角と 芭蕉翁撰 田舎
句合 延宝八庚申晋子吟 螺たりの僧よ既よ
芭蕉翁判詞 の序より 螺子と 法華の原 貞享四丁卯
小麒角とも 不卜撰
あやふしより 晋其角と 梅を 江戸鑑子 緑の 江戸鑑 ホよ亀鶴と
晋其角 とあふ 宝晋 易経 晋の卦乃象辞
鍋 文字 佐玄龍 文山の号 佐氏号 煥甫又池蕉 享保八年

十一日没 増上寺中 平 遺額をこの
浄運院に葬る
と号 五元集 ふ 傳を寛斎先生 生ふ
寛斎先生服部氏名保庸 俗称平助 後藤五郎 享保
六年六月三日没 日向蕉荷谷徳雲寺に葬る 日記 平助とあ
此寛斎の詩を太巌 和尚鎌倉四覚寺住持百六十
正月三日化 三世名梵千 俳号幻吁 貞享二年
寿五十七 事 新山家 洋の画を英一 墨ふ 画
暮者子と呼ふ 英一蝶名信香又安雄幼名猪三郎 後次右衛門 熊名暁雲 享保九年
正月十三日没七十三 本摂 兼教寺中顯 兼院に葬る
和漢文操 雷柱子とより 新山家 狂雷堂とより
皮篭摺 有竹居と号 雑詩集 狂而坐とより 六藏葬
義哉茶 文会黄竜の法号あり 未若葉 類柑子 笠子 渉川と
とよ 渉川の号 五来 孫の 町 孫
の法号 孫 孫 孫 孫

類柑子に晋子ら名い野雉をとりたるよりの判みあるべし
波川と走るすがおとゝあるまるまわるゝ川とよろう昇
竟廣漠野乃牛を求ゝ廊菴ら同類をもすめん身
深ゝと出て沼波ら「雲の有の裾とる妖怪わら
川」又同集に右此ら句に「梶灯や山吹きくゝわるゝ川」
と俱に晋子を悼ゝ句あり堀江町を渋茶をゝ延宝
の末ゝの日記に天和三年芝金地院に於ゝ虚栗
を草まよゝ出る寄跡考に此日記たゝめ二葉をゝ
末を出さゝよゝ天和三年金地院にを記ゝ
續虚栗編集の須まて今此花ゝ句ゝ草
茅の泉へ門の雪掩あゝ句と彷彿たり」此句あるを以て証と
すゝ芭蕉

四年寄跡考に貞享の須嵐雪彼笠を晋子と同居をゝ
出る一丁墨初代歌尺命寥和撰に今いむゝ嵐雪い蕉を平助
とゝひゝ時其角ら許にてふとんひとつを敷
遣ゝに刷れのふゝりいおゝ「ゝ行さゝてこゝつに蕉ゝ
蓑ら和ゝと」と砌如のふゝるに乎山風のふゝりこ悼ゝ
ゝ句い則破笠ゝ尚時い蓑中庵笠蓑とゝ一懐ゝこの
かゝの撰に隆達節をあゝ「やふれ蓑笠ゝ」とあゝも
破立ゝのをおゝひよせゝるこの後考をゝつ

栢延日記に其角
に川に行ゝ公ゝ一ト宵ふて壁に九穴を明ゝ出
蕉の祝伽をあゝ「陶元とつ地孫ひとつのあ行を
ゝ嵐雪ゝ寄に同居ゝ二人あゝ俱行のに蓑を

いたつらにすさまじくなりぬる又向島白猿よ晋子庶川本場
小位なるを新なる梅塢きしとし梅塢老人の話く 花摘
集 小市の街屋のふきをふときく「晋作り葉ぶき春の
はきりぶ」といへる句あるを考ふるに全地院およういつれ
の市中へうの位ひを求めしかとおもいる元禄三
年のなく いつを昔 小居をうつしてときて「嵐ふもはて
ふ〳〵まんを籠」とあるをこれい又同年のをいつく〳〵
この消息をふ〳〵 晋子杉の森小田菴あると柳陳更の話く
五元集 小神明町〳〵居を志めてときて「り会の杉と
あ〳〵そをかをを竹」とあるを考ふるに元禄十一年六月
廿日神明町〳〵居をうつして同年の冬十一月類焼しく

ぬる十二年の冬ふ〳〵 皮竜摺 小六月廿日居を移しを竹三
位年を植つひきをを小ふかころひ〳〵保声ありとき
「竹の埠さらよ絞るはとあり」又 同集 小晋子居を
南港ふうつ〳〵竹を植て有竹居と号をを「玉孝を
ふる竹狂ふ〳〵竹をとをを牛寂り「鳴〳〵を復より居
て小萩系」 豊山云有竹居の号い有竹三年の冬ふををつひるを
南港ふうりてとをを「い神明町の 又 同集 小考をもむ不深第下句
居をきしていひ〳〵 推をうを和
より上るべきはまをのの数小四望の後弦まて仕まいを
籠庭をとひ中をを結るをを
きぬ〳〵ぶ」と句を〳〵ととをよる有竹居の吟〳〵 此句五元集と和水新宅とあり
浄書の誤矢 五元集 小新宅の吟「汐汲をうつてみをやをの

[illegible]とおもふ[illegible]ときの[illegible]
町へ居をもとめふれい[illegible]

五元集

種竹三竿

竹の色[illegible]ひとすじまつ
影宅

竹の場のかたあるべし　岱　俊

類柑子

科(イナムラ)[illegible]

冬中の家を去る

竹の屋[illegible]

焦尾琴の序云夏享甲子の春二月仲旬上京より
日記をふるのち元祿戊寅の春[illegible]一日[illegible]

代[illegible]
[illegible]十日のあ[illegible]池奥の[illegible]
[illegible]上略[illegible]
[illegible]
[illegible]

同集

九尺二間の住居
[illegible]

宗湖のうき世を此に雪[illegible]
晋子鄭[illegible]の後と志[illegible]
[illegible]
句をして集の名を焦尾琴とせり蔡邕の故事を

接き可 捜神記 茅こゝ流れあるゝ

五元集 ホ鄭焼の比多郡の居を四て一樗ゐ王子を送る人
よとさて〳〵わ〳〵つとや雪のゑあ千とよむ一とゝゝゝり
て〳〵ひいつれの多郡〳〵居を求〳〵ゐん

類柑子 ホ物を使る時い才の信あをあとおりふもはゝうり
ゐの〳〵宗信の中とて〳〵西るまゝ世中〳〵れい心の
り処をうそへて紫雲の去をけそふる四十まて世出を
見〳〵うといへる雲雪う高りとをあ〳〵矢を考ふるる
て〳〵ひ四若ホ移信を〳〵ふ〳〵もおとゝる又 同集 〻昔世
若の南次ホ猟人の市を〳〵て花りの去〳〵羊紙路光
の〳〵ひをとりけ〳〵〻商へる年ホ猿を塩漬ホ〳〵

い〳〵つと〳〵引上て〻の比ハ魚をあつゝる中〳〵〻
昔世ッ若の南次とをれ〳〵い方の射ゆあとい〳〵あ〳〵を
さて〳〵ひ〳〵ゐ〳〵ホも忘れ件町とゝるる ありて
花うの去〳〵猟船の新ひを高へる氣あり コ中ハ氣との
あ〳〵ゐあいよ〳〵ゐう〳〵〳〵杭とゝる 抑隣 云晋子の旧地ハ
地面のよ〳〵ナきれき。去年町二ケ所ホあり世谷裏塩町 ナしき
晋子ら住〳〵い塩ゐ去塩町〳〵

五元集 〻芋や去ゐ郡ゐの〳〵礼正〳〵と口去きみ〳〵も
四若ま住居の比の吟ゐ〳〵んを郡ゐの〳〵芋を中〳〵
年姫の迄れて七〳〵と〳〵へるきゐ元を〳〵し
この中い町〳〵將庵を〳〵ゐ元孫十六七宝永改元の比ま中

類柑子 全篇れ〳〵ゐる中ま病おと〳〵ありてつゐホ幸紛

のこゝろみとありぬ嵐雪松風流洲青流とゝもようてう也
これの反古とりあつめ〳〵おもしろ〳〵一第ゆ
おさむけれとつとめ一ゝとあ〳〵つ外まとはもり〳〵
あり秋色といふもの女あつ〳〵と久〳〵笑を負
ふきえさ〳〵ありまゝ見日祥月の志をゝゝいと
ふあ〳〵ものゝ〳〵ゝゝ

類柑子 編集孫〳〵さる中み月まろ〳〵る名の文まく
明〳〵く晋子ゝを俳ふ世〳〵ふ三十ゝ年のるゝと
おゝゝ孫

五元集 ふ自悔の句ゝ〳〵ゝをゝゝいろあゝ〳〵年のゝる
といひ〳〵ふ三十ゝの時し

同集 ふ姫の月まろ〳〵を悼むゝ〳〵の藤ゝ月ふゝん
と被され〳〵」といひ〳〵ふ宝永三年十一月廿二日ゝ法名
妙月童女ゝゝゝゝ

豊山云月三尺後ゝの字池則の活ゝ晋翁の句已よ遠あり

類柑子 春暖閑炉ふ坐の吟ゝゝ キ角
うゝひゝの焼ゝ〳〵きり〳〵 〃
笑の擬むすふ 青流
茶子の雪待乃清泉ふ中ん
洲芙ゝ反の白ひゝゝて 〃
身ゝ種ぬひり拾ゝゝつゝき 角
風のゝひゝ笛の毒ふ 流

角

流

角

月の出大空明よ立ゆくて
河はまく〳〵刺いそつゝら
さるさ波ゝのまゝゝあるよあふ九条嶋

一序文の刺よ晋子ねふさきゝゝきふてわゝれぬこれ
そ生前おさめの吟くいまゝひあいきれい其真より示
しひゝふ秋の気を感〳〵末の句よ童侯祥ふの九条
詩の子細よ分まゝう孤ひ〳〵ゝ中の天の一句古今
対節の趣をつゝあい風梁義序のゝゝり古今
古友の契りをおくゝひ出ゝゝさるよ志ゝきゝゝよゝゝ

ゝい新桂子よ晋子ゝ陳きれ〳〵ゝゝあゝゝあくおの色
晋芳を墓ふの古ゝゝ切ふふいきあゝ孝
養ふゝゝ一世の山ふ〳〵をゝのゝゝ いゝゝゝ
ゝ英ゝ英をつゝ伝るのゝゝ

類桂子ゝ此所ふ年久〳〵伝別ぬゝゝゝまゝぬゝ猩
の波ゝゝゝ神をゝ〳〵 竿の力ふゝゝゝゝて白樺ゝ
「新まれぬ岩の引ふ二月ゝ」ゝ悼ゝ〳〵白をゝつて
うやい町伝花の沈対まゝゝ〳〵ゝゝゝゝ宝永四
丁亥ゝ〳〵二月廿九ゝあゝき年四十七 俳諧系譜 五十五ふ
法ゝゝつゝふよ二本模上行ゝの筆下芸のあゝゝゝ

ありぬ 五元集 に「我死て拔柳うすき酒入のむ」
きめかぬ我のあひたの」と口ずさみしい生前の辭世
ありふしきやきしきの中時よあること拔生よ
感あり 南無流浦 にうひきの白をふて辭世とす
晉子新拔ひよおて人人墨をさひうひ宗匠の白
まて百ふせらぬとそらふれい晉子ふと拔て
きくこ心色赤恥さるを「多之や田をこめ
ゝりの新あり」をいひとさて玉を墨をあ白
声色をつうこをさうり新をうこみるてまの
あるりよあるる 金集 に雜用法ばっる「てのの
ふいんふて せきくせ天くるませ新あるい新」

此歌をこれのあんさい元祿六年六月十八日の
ありて一気のこつるこ生の業ることを数
まきる 強心の感く

十二

是吉ゝ事

周こ云ふ吉晉子よ往ふ元祿のこめうのこと
おもいる 花摘集 に尚年をこ寓ふきくきる才の祿ゝ
こくるつきこるやあこせめふい言下て
伯ふを七色あるん 星ふり 一 芭蕉

此句出て元禄のはしめより徒しも時世の花のみ
編集は元禄三年にて

【末若葉】に

二月吉日とて是橘か剃髪入医門を祝す

初年よ猶の掛りし頃家　翁

【同集】

製　白礬

明礬のふいしきある火燵かな　是橘

北枳南橘のことくの父は醫者なれは術を
習ひ平か俳諧を〔?〕此句を〔?〕二三年の
か〔?〕ありしあとて家〔?〕よりは刑
〔?〕

汝豚ゆえ文をる子の吉原かな　其角

その時長嘯の名を是橘とあらため侍り
けるとそ

末若葉遍集は元禄十年之丑年の冬より春を掛り
改めしその名のうちて時々ゆくく【類柑子】【三上吟】等
ゟし橘よまり享保四己亥年晋子か十三回忌を取ふ
【類柑子追加】ふ白雲か句ふ「是吉をとし注て年ゟ柳のふ
傑の筏」と悼しし句あり此折をもよ牙まりきふ
其去か切名は晋子か編集も残りし風雅を四方へ及
さしむ新柑子一本追加あるもの出るて追加は秋色か
集る所く其庵にて水間沾徳の跋あり

錦繍緞

春さきはつゝ咲そめる花は
山ぶゝや清水ながれ流れ
林のみ肥ふとりて
春風のゆまん　二月　花の春

其角奴　是丸
紫軍奴　二七
尚白奴　与三
仙化奴　吼雲

今世諸名家詠吟

京　蒼虬
基の春いまつゝやもゝちゝとゝ
菜白ゝ咲りぬ春ゝ咲りなれ

大坂　世南
あやめゝとき〳〵ふるゝさを花ゝ

タニハ　奇渕
古井戸や咲ゝ咲の塔の花ふ

オハリ　武陵
九ゝゝゝゝ咲ゝ咲ゝ春の菜

ミカハ　沙鴎
孫おゝ〳〵ゝ咲ゝ咲ゝ

アフミ　岐臺
ゝ咲ゝ咲ゝ咲ゝ

ミカハ　阜池
ゝ咲ゝ咲ゝ咲ゝ

アフミ　閑高
ゝ咲ゝ咲ゝ咲ゝ

[illegible]　　源寺現住　西月
[illegible]　　肥長サキ　菊也
[illegible]　　アキ　田水
[illegible]　　ツミヤ　仙瓢
[illegible]　　イセ　心原
[illegible]　　カヒ　嵐外
[illegible]　　イツ　一瓢
[illegible]　　ミチノ　若人
[illegible]　　ムサシ　可布
[illegible]　　ヒカヒ　竹外
[illegible]　　上毛　羅佛

人の世[illegible]
[illegible]
思[illegible]の大根[illegible]梅の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

サカミ　洞々
ミチノク　きよ
、多世
、曰人
、馬年
、二晶
、子人
ヒタチ　涼谷
下サ　茶彦
八朶
大梅

[illegible]　　篤笠
[illegible]　　詠帰
[illegible]　　護初
[illegible]　　何丸
[illegible]　　久滅
[illegible]　　碓嶺
[illegible]　　一具
[illegible]　　萬里
[illegible]　　一蕙
[illegible]　　茶静
[illegible]　　文屋

あ[illegible]の戸[illegible]
町中よ板塀あ[illegible]　　園角
[illegible]　　風馬
[illegible]　　是物
[illegible]　　老驥

[illegible]　　豊山
[illegible]
[illegible]
[illegible]

日く醉　如泥

其角翁

花はなれて市の塵をあはれとはん　豊山

老軍の髭をまとふ春の雨　詠帰

白雲のたいさきに門をまちあるや

燒て、動くに鄭のとく　豊也

庵の南うつもれぬ紙の衾の中　老驥

ゑ〻の名をとゝまる冬ふまるゝ　豊九

庄伴〻ぬるこの孫鶏をまもる　閑逸

部屋より出て人ゆる強をし　交和

うゝ無をまるのきよきくらふ　山

蓋の塀をうとゝ十五夜をあく　驥

ゝゝとゝ蓋杯ゝとゝ　鳳車

悼し蓋ゝとゝ起ゝのゝ　豊瑞

動ゝゝ一見杯ゝ波込んて　帰

湯をゝゝあてゝあとゝ　山

小口ゝゝ毛ゝの庄伴をいゝゝ　也

ゝゝ向ゝゝ　逸

山吹と馬醉木を縄ゝ引ゝゝ　豊園

オ

[illegible]

味噌漬すし　次の[illegible]堂の蓋物

[illegible]安家より[illegible]

物[illegible]　[illegible]

[illegible]のきいまて傘をもち

[illegible]仕あり[illegible]

紅の実[illegible]

焼[illegible]

[illegible]

[illegible]

也　豊和　豊翁
九　瑞山　豊翠
東　帰　車
園

ウ

[illegible]と実の[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

也　豊阿
山　帰
和　翁
驥

十八終

執筆

後序

夫、霞は不茶の老たを倣潔い
清秘なるもの其、清秘なる源泉を
清い妙義也秘なる調はさるを
云ハ口をを和て壹を朱
調窓雅竭さ下清秘なる泉を

如くあるを謂る李白一斗百篇
はんいたるかくの日本乃
要其角を点飲るの江川を吸ふ
らの如く句百篇を中も面白び
の秀逸ハ等く諸人の耳目を
驚ろ〻実ニ是れ我流儀美

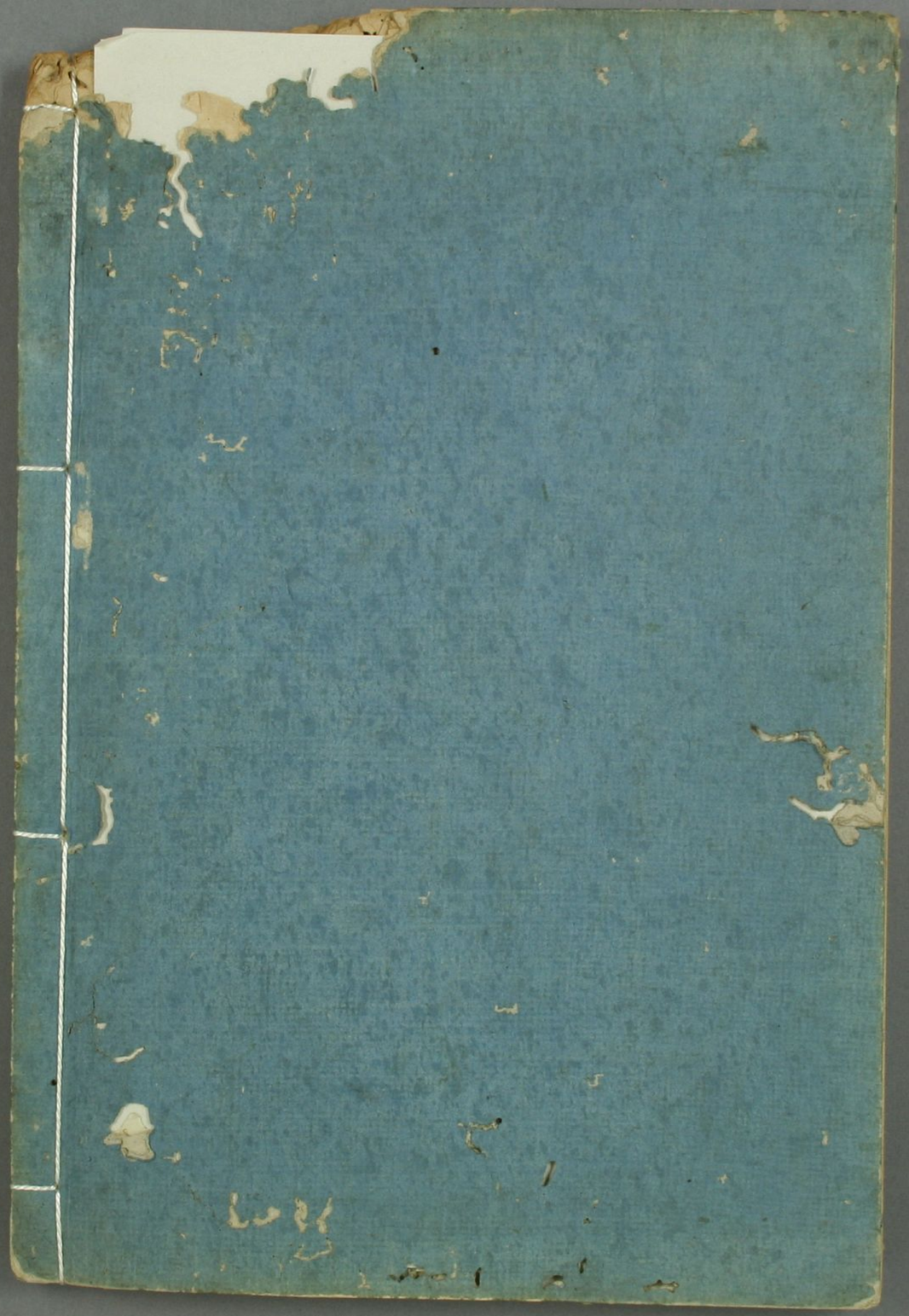
の法る有余手本の一人也あはし斷
刻の役者といへども其教授拳古屋
かゝさる也茲ニ五世尉大斎なる者い
若干を志法彫利を見さる性にて
古さを拾ひ新しきを求ふあ
稀も絶るを絶廢るを起す乃

癖あるを響に要るよう自筆の日記を
ひらきはんるを古き一世の古意よりを
はるるに今の一小冊に撰び抜き
来るを乞て部をと序せよと投来
ぬ無猜一下衣侯人を実意を忘ひ
再び後人を孫麿の効を始終

たのみ又父母に子を孫ならしめ
ん為辞車に乗迷い祝ぎも口に涎を
流し以伏稽首の誠を筆に形
要子一仍新に号けぬ抜うはたしき
るあ侍るあの為発押形なを
のみ侍るを三日あれい人無いはき

あつめぬるハ世にひろき公のあいには
なれハ流いてあつる悔しやさしき
文ハ朱離鉄舌にして魚目を珠に
換ふるに等しかれとも鋒帖諸君の阜
見の歯牙にかけまさをそへ恥るのみ
天保二辛卯春王八日校合之　老渓

咫尺齋豊山著述目録

晋子伝録　上木
咫尺集　近刻
俳匠年代便覧　追刻
俳匠年代記　折本　全
李寄本草　全

天保二辛卯首秋